# 第二次『明星』以後における與謝野寛・晶子の断想

## ―新発見の書簡を中心として―

近藤晋平

### 第一章　與謝野晶子との出会い

五年ぐらい前だったか、デパートの古書籍展示即売会で與謝野晶子自筆の短冊を入手した。これがこの歌人との出会いの最初であった。たしかに私はこれまで、研究書や全集、それに教科書と何度も彼女の作品などに接しているし、そのときはじめて作品を読んだわけではない。それがなぜ最初の出会いなのか。私がずっと接して来たのは活字の世界における晶子、いわば化粧された顔だったが、この短冊はいわば素顔の晶子に触れたようなものであった。まさしくそれは出会いと云うべきものだったのである。しかも私たちの生活環境の身近にある宇佐神宮を詠んだ作である。私はいまだかつて晶子の息づかいをこれほどなまなましく感じたことはなかった。

ふりにけりかしこき宇佐の呉橋はながらの橋にあらぬものから

呉橋は宇佐神宮の旧参道に面して架けられている重要文化財指定の橋である。国道十号線が新しく整備されてからこの橋は裏参道になってしまったが、かつては勅使など歴史上の重要人物や各地からやってくる一般参拝者たちはすべて呉橋を渡って静寂漂う神域へ入ったのである。宇佐神宮は、その社殿が七三一年（天平三）造営されたのにはじまり、現在の社殿は一八六三年（文久三）のものだという。今でこそ観光化されているが、晶子がこの地を訪れたころはもっと深い木立のなかに仙境がひろがっていたはずである。昭和六年九月下旬から十月上旬にかけて晶子は夫の寛とともに別府周辺（久住も含めて）・宇佐・中津を旅している。この旅で詠んだ一連の歌は「西國の秋」と題して雑誌『冬柏』昭和六年十月号に載せている。そのなかの宇佐神宮を詠んだ四連作のひとつが「ふりにけり……」の歌である。このころの晶子は往年の情熱がすっかり沈静して、静かに人生をふりかえってみる落ち着いた円熟の境地に到達していた。この九州の旅は夫と二人の存在感を確かめ合おうとする旅ではなかったか。その歌のほとんどは淡淡とした心境を思わせる詠いぶりである。なかでも宇佐神宮での歌はその傾向が顕著であるように私には思える。しかしながら、沈静したなかにも晶子らしい片りんもみえる歌だと思う。まずその第一は「ふりにけり」と初句切れで詠い出している感動の強さである。第二は「ながらの橋」という古今集などの歌枕をよみこんでいること。これは「長柄川」（大阪市大淀区を流れていた）に架けられていた橋で、弘仁三年（八一二）現在の長柄川のあたりに架橋されたといわれている。「あふ事をながらの橋のながらへて恋渡るまに年ぞ経にける」（古今集―恋五・八二六）―坂上是則―などという歌によまれているのは周知のことである。その第三として、「あらぬものから」と逆接の「ものから」を用いて倒置法で表したことである。

九州で與謝野晶子の自筆の短冊が手にはいることはめったにないことである。入手した当初は国語の短歌教材の授業で資料として利用することができるということで満足していた。なぜならば、地方の高校生たちは教科書に採録されている作家や詩人たちと活字をとおして接するだけで、肉筆の息吹に触れる機会に恵まれていないからである。これまで私にとってはるかに遠い存在でしかなかった晶子が信じられないほどの身近な存在となった充実感を、生徒たちにも味わせることができるだけでも生きた授業が可能になると考えた。しかし、日を追うごとにそれだけではすまされないような思いが強くなった。この短冊の出所は一体どこなのか、背後にはどんなエピソードがかくされているのかなどの興味が沸いてきたのだが、どこから手をつけてよいか見当がつかぬままに数年が過ぎたのである。

このような出会いが私にとって決定的な意味をもち、第二章以下に述べるような研究に入りこんでいこうとは全く予期しなかった。あくまで推論の域を脱しないだろうが、與謝野寛・晶子の素顔の一断面をうかがい知ることができた点はこの上ないよろこびである。

さて話は横道にそれたが、ここで『定本與謝野晶子全集　第六巻歌集六』に収録されている宇佐神宮を詠んだ四首を挙げてみよう。

丈およそそろひて蘆のはなびく宇佐八幡の神領の川

（以下宇佐にて）

古りにけりかしこき宇佐の呉橋は長良の橋にあらぬものから

太宰府の大武の郷の参進をなほ待つごとし宇佐の呉橋

宇佐の秋むかし源平藤橘の寄せしつるぎの光る殿かな

この中の第二首目は前述の短冊の歌であるが、第一首目のもまた晶子は色紙に書き遺している。その実物にはこのあと第二章以下に登場する江上家で私は出会ったが、発表の際に彼女は一部改作している。ちなみにこれを紹介するとこうである。

たけおよそ揃ひて蘆の花なびくつくしの宇佐の神領の川

夫と二人の九州の旅は晶子にとって何であったのか。最初に書いたように、それは波乱の人生を静かにふりかえり、二人の文学の再出発と集大成を期した旅だったと思う。しかも少年時代の寛は明治十三年から十五年まで布教師となった父と一緒に鹿児島で生活している。彼の生涯のなかでおそらく最も物心両面において恵まれた時期を送ったこの九州の地は、いわば寛の文学の原点と言ってもよいかもしれない。その九州は地理的にみて当時は東京からははるかに遠い「つくしの国」であった。晶子は宇佐神宮の境内を歩きながら「はるばると来つるものかな」という感慨に浸ると共に、自分たち二人の人生をかえりみて同様の心境になったのだろう。その直感が「つくしの宇佐の」という表現となったにちがいない。それをどうして発表の時に「宇佐八幡の」と改作したのか。その意図するところはいくつか推察できる。まず第一に、発表作品はほぼ全国的な読者の目にふれるので、「宇佐八幡」としたほうがポピュラーであること。第二は「つくし」という九州地方の古称は人々にあまりなじみがなく、狭義の「筑紫」と誤解されやすいという点などである。晶子はかなり改作の多い歌人といわれるが、この歌の場合は改作したがために文学作品としてはあまりにも平凡になりすぎてつまらなくなってしまった代表的な例ではなかろうか。感性の鋭さによって内面感情を立体的に表現するところに彼女の特徴は存するし、年を取ってからもそれは潜在的には変わっていないはずである。また、改作とはいえないが色紙や短冊に例えばひらがなで書いていて、活字に発表する場合には漢字になおしていたりしている。これはしかし、色紙や短冊の場合は文字の乗りがよいかどうかを考えるためによく行なうことである。なお念のために書いておくが、第三首目の歌の「大武の郷」は「大武の卿」の誤植であることを出版元の講談社編集部に問い合わせて確認している。これは初出の誤植ではなくて、定本與謝野晶子全集出版にあたってのミスプリントである。

とにかく一本の晶子の短冊との出会いは私の文学に対する関心をより深く大きくしていくきっかけになったことは確かである。これから述べようとする晶子および寛の素顔の断面は、資料的にも学問的にも浅いものでしかないが、これまでの晶子研究や寛研究にはほとんどみられなかった側面を提起することになるという点で若干の意義づけが出来るのではないかと考えている。

## 第二章　書簡からみた寛・晶子の素顔

### 第一節　書簡入手から調査の経過

昭和五十六年一月、北九州市内の古書店で晶子の書いた書簡を発見した。それは全くの偶然であった。福岡県高等学校国漢部会の理事会が前日に開催され、そのあと小倉の森鷗外関係や若松の火野葦平関係の文学散歩を実施したのだが、その二日目の日曜だった。私もその当時九州地区国漢部会の事務局長をしていたので参加していた。正午近くに解散して北九州地区の事務局役員だけで帰途についたのだが、役員のなかのひとりが自分の懇意にしている古書店に立ち寄っていこうと私たちを誘ったのがきっかけだった。私たちが入っていくと店の主人が「與

謝野晶子の手紙を手に入れたのだが。」と言って見せてくれた。そしてさらに「鉄幹のも手に入れてきた。」とつけくわえて言った。私は奇しき因縁に驚くとともに、自分の所有している晶子の短冊との符合を一瞬考えてみた。短冊入手当時から、晶子は一体誰にこの短冊を書いてやったのか、どんな裏話がかくされているのかなどの疑問が頭にひっかかって離れなかったのだが、この手紙の発見が何らかの糸口になるのではないかと直感的に期待した。作家研究にとって作家の書簡は重要な鍵になる場合があるのでぜひ欲しくなって、主人に無理を言って譲ってもらった。自宅で時間をかけて読んでいくうちに非常に興味のあるいくつかの点が出てきて、私にとってそれは貴重なものになったのである。その興味のある点とは次のようなものであった。

(1) 晶子の書簡には、土地の名産を送ってもらったことに対する謝辞と「明星再興」を決意するにあたっての協力依頼が述べられているし、しかも晶子が書いた筆跡であることは歴然としているのに署名は寛との連署になっていること。

(2) 寛の書簡には、宛名の人物である江上孝純の生活のかなり私的な面にわたることがらが書かれていて、寛夫婦の短歌を送る旨が述べられていること。 (3) これらのことからみて、江上孝純なる人物と寛・晶子はかなり親しい関係にあったことが推察できるが、一体具体的にどのような出会いをして、どのような関係にあったのかということ。 (4) 寛の書簡は江上孝純の自宅と思われる「大分県宇佐郡八幡村」に出しているのに、晶子はなぜ「大分県中津町二豊新聞社」にあてたのかということなどの点である。どうしてもこの書簡の背景をしらべてみたいと思ったが、どこから手をつけてよいか見当がつかず、時間的な都合もつかないので学校が春休みになるのをとりあえず待つことにした。

調査の第一段階は晶子の書簡の宛先を手がかりに行なうことにしたのである。晶子は、第二次『明星』を創刊するにあたってなにゆえ地方の一ジャーナリストに協力依頼をしたのか。江上孝純という人物は寛夫婦にとって一体何であったのか。さらに、寛の書簡中の「御文中の歌の儀お承いたし候。両三日中に両人より差出し可申候。拙詠につき御採否は御随意に願上候。」とある「短歌」は二豊新聞への寄稿だったのか、それとも他の目的があったのか。これらの疑問点を解明するために、当時の二豊新聞の資料を大分県中津市立図書館に求めた。しかし、資料はまったく残っていなかった。それでもなんとか手がかりはないかと関係書類をあさっているうちに同名の新聞社が市内に現存していることをつきとめて訪ねてみたが、それは第二次大戦後に出来た会社であって、江上孝純にかかわりのある社ではなく、もちろん当時の新聞は保存されていなかった。書きおとしていたが、晶子の書簡は大正十年十月二十六日、寛のは大正九年二月二十八日にそれぞれ書かれたものである。第二段階の資料収集は江上家の周辺から行なうことにしたが、これには困難な点がいくつか考えられるために容易に腰が上げられず、夏休みまで実動は延び延びになった。問題点の第一は、手紙の宛先の場所に行っても江上孝純の関係者が住んでいるかどうかの確証がつかめず前回同様無駄に終わるかもしれないという点であり、第二には役所に行ってその消息および係累を調べれば分かるかもしれないが、戸籍を見せてもらうことになるので種々の問題から非常にむずかしいのではないかという危惧をいだいた点であった。そこへ十月下旬に行なわれる九州地区高等学校国語教育研究大会での研究発表の話がはいってきたため必要に迫られて、七月下旬に大分県宇佐市役所四日市出張所に思いきって出向いた。幸いに江上家のことをよく知っている職員がいて、その消息を教えてくれたので心配は一挙に解消した。

江上孝純には子供がいなかったために養子をもらったが、その人が現在北九州市小倉北区内で病院を経営している江上正孝氏であることを教えてもらった私はまずその人を訪ねてみることにした。はたして研究をすすめるうえでの資料が残っているのかどうか不安はあったけれども、何でもよい、話さえ聴くことができればという期待を持って出かけた。ところが、その自宅で私は強力な資料数点を拝見させてもらって大きな収穫を得ることができたことは望外のよろこびであった。それらの資料とは、㈠、宇佐神宮を詠んだ晶子の色紙（第一章で示したもの）。㈡、江上孝純の母親の米寿を祝って贈った寛夫婦の短冊。㈢、孝純宛寛の書簡。㈣、磯谷小波・久留島武彦の短冊（孝純の母親の米寿の祝いに贈ったもの）、などであった。これらを見ながらその裏話を聴いたのだが、さらにそれに肉づけをするために、幼少の頃から孝純の家で育ったという江上巌氏を大分県宇佐市四日市乙女新田の自宅に訪ねた。この人は孝純の家で育ち、医者になるための勉学をしていたが、医者になるのを嫌って孝純の家を出ることになった人である。この両者から聴いた話を総合して、江上孝純という人物の簡単なプロフィールを述べておくことにする。

江上孝純は明治十年十二月、当時の大分県宇佐郡八幡村乙女新田に生まれた。頭脳明晰だったので学問をさせたほうがよいという家人の判断で上級学校に進学した。旧制大分中学から選抜されて学習院に進んだが、その時代学習院といえば皇族か華族しか主として行くことができなかったので、これは異例のことだった

にちがいない。そして学習院から京都帝国大学を卒業して故郷に帰り、弁護士をしながら中津に二豊新聞社を興して社長をしていたということである。この新聞社はのちに大きな新聞社（名称不明）に吸収されたが、当時としては地方のかなり有力な新聞社だったと江上巌氏は証言している。江上家は八幡村では有力な地主で財力もあったにもかからず、孝純は名利に無頓着であったらしい。豪放磊落でずばりものを言う性格で、非常に純粋さを好む人物だった。それが寛と意気投合した要素のひとつではなかっただろうか。彼の、周囲に対する影響力は大きいものがあったと思われる。文学界・政界などに広い交友地図を持っていたことがそれを何よりも雄弁に物語っている。たとえば政治家では近衛文麿の父や吉田茂などと交流があったと江上正孝氏は話してくれた。近衛文麿が首相になる際、「君は総理大臣になってはいけない。君にとってそれは不幸である。」と諫めたというエピソードもある。これらの点から、寛夫婦の生活の襞の部分にかなりの存在として入りこんでいたであろうことは容易に想像することができる。大正九年に書かれた寛の書簡にその人となりをにおわせる一節があるので、ここに全文を紹介しておこう。

拝復

御清健奉賀上候。

御高文拝見仕り候。本年は御母君喜寿の御賀を催し玉ふべきよしめでたく奉存上候。御命長して明治以来幾多の豊富なる文化的推移を御覧に相成りし母君の御多幸を何人も羨み申すべく候。まだお目に懸らず候へども　小生どもの慶賀の微意をもて　母君へお傳へ下され度候。御文中の歌の儀相承いたし候。両三日中に両人より差出し可申候。拙詠につき御採否は御随意に願上候。

荊妻よりも大兄へよろしく申上候。

政界の乱調子につきて世情もまた混雑致し申すべく候。ます〳〵御自重され御指導の御重責を國民のために御果しされ度候。

二月二十八日　　卿々

江上學兄　　御もとに　　與謝野寛

## 第二節　『明星』廃刊前後の寛夫妻の生活

『明星』への晶子の参加、寛と晶子の結婚と、明治三十年代の寛の周辺ははなやいだ雰囲気に包まれていたが、その生活は非常に困窮していたといわれている。三十五年の夏に寛宅を訪問した藤村紫翠は、寛の生活の実情を目撃して驚きを伝えている。一方、文学活動の面からみてみよう。晶子かまだ鳳晶子の時代に『明星』へ短歌を投稿してからは、表面にあらわれないが『明星』の実質的主体が徐々に寛から晶子に移動していきはじめ、歌壇における彼の孤立のきざしは始まっていたと私は思う。直情径行の寛の性情は、日本に近代的自我の解放の気運が高まるなかで、時代にいたずらに迎合しない思いきったますらおぶりを発揮し、それが青年たちの心に内燃していた常識を越えようとする意欲を助長したことは否定できない。しかしながら、彼の気性の激しさと自己の短歌の確立へのあくなき情熱は『明星』の純血主義に固執するようになり、彼のもとに参集した青年歌人たちが他に作品を発表することを禁ずる度量の狭さをあわせ持っていたがために、同人たちの不満をくすぶらせる結果になったのである。寛の評価はしだいに下降していくとともに、それにかわって晶子は『明星』における位置を確実に定着させていったと私は考えたい。それからいまひとつ『明星』の存在理由を危うくしたものに自然主義思潮の台頭があった。寛の悲憤慷慨調の詩や歌は、たしかに、急速に進行する資本主義国家体制の志向と一般民衆の意識の前近代性との懸隔のはざまで、人間感情の思いきった吐露を試み、浪漫主義思潮の先駆とはなりえたけれども、反面にはみずからの城壁にとじこもって社会的な視野にひろがりえなかったのである。寛における感情の奔りは、晶子における自己認識の上に根ざした自我の解放をひたむきに求める情感の表出とは本質的に異なっていたのではないか。

このような情況のなかで青年詩人たちの心は急速に寛から離れ、さらには新詩社からも遠ざかっていったのである。そして、もともとあまり安定した生活を送っていなかった彼の家の窮状はますますひどくなっていくばかりであった。そのころの彼の心的動揺と焦りを端的に示しているのは、明治三十八年に「鉄幹」の号を本名の「寛」に変えたことだろう。しかしこのようなことではもはや新詩社の名声は回復しないことを彼はよく知っていたはずである。寛はすでに老いた詩人でしかなかった。

明治四十一年に入ってからの寛宅は家計を晶子の原稿料などでかろうじて支え

る状態まで落ち込んだ。このような中で『明星』はこの年の十一月に百号をもって廃刊に追いこまれていったのである。明治三十三年四月、時の詩壇および歌壇の豪華な顔ぶれの参加によってスタートを切った『明星』ではあったが、その終刊は実に孤独で何故か寛の詩人としての決意のみが空回りしていると感じるのは私の思い過ごしだろうか。彼は終刊号の巻頭に次のような「感謝の辭」を書いている。

わが『明星』は本號を以て壹百號に滿ち、記念として此の大冊を出すに至りぬ。顧ふに、創刊以來の歳月は短しと云ふ可からず。此の間に於て『明星』の經營に數次の波瀾あり、予また多少の酸味を嘗めたりと雖、雜誌本來の主張を支持し、新詩の開拓と、泰西文藝の移植と、兼ねて版畫の推奬とを以て終始し得たるは、先輩諸先生、畏友諸君、讀者諸氏、及び、社中同人諸君が熱烈なる助成の賚として、茲に深く感謝を表する所なり。就中、先輩諸先生畏友諸君が何等物質的の報効を計る能はざる『明星』に對し、過去九年間、常に甚深の同情を以て高稿を寄せられたるは、文界稀有の事例にして、不敏なる予が師友を有する福分の無量なるを感激せずんばあらず。特に感謝すべきことは、先師落合直文先生、森　林太郎先生、上田敏、馬場孤蝶二氏、及び、薄田泣菫、蒲原有明、長原止水、藤島武二、和田英作、三宅克己、中澤弘光諸氏に負ふ所の多大なること、是なり。是等諸家の激勵と扶掖との有る無くば、我等如何なる邪路に行き迷ひしやも未だ知る可からず。

また、創刊の當時、同門の友人文學士某君が、予と共に債を負ひて經營の苦痛を分たれたると、大坂の紳士小林政治氏が、八年の久しき間匿名の下に毎月經費の不足を補はれたると、東京の書肆明治書院の諸氏が、發行及び販賣の上に幾多の便宜を與へられたるとは、予の永く忘るる能はざる所なり。

本號をもって『明星』を廢刊せむとするに、二の所因あり。經費の償はざること一、予が之に要する心勞を自己の修養に移さむとすること一。之を三四の先輩畏友諸氏と同社の諸君とに諮りて、今やその協贊を得たり。但し『明星』は廢刊すと雖、予が詩人としての志は、既往より當來に渉り、宛ら一條の鐵のみ、更に十年の後、製作の上に何等かの効果あらむことを期し、以て大方より受けたる高義の萬一に報ぜむと欲す。

明治四十一年十一月、東京に於て、

與謝野寛識す。

「与謝野家での夫妻の立場はすっかり逆転して」（福田清人・浜名弘子『与謝野晶子・人と作品』清水書院刊）しまった。日を追って自嘲的になる寛には往年の面影はまったく見られなかった。そのような夫を晶子は不憫に思うとともに、そのうらではふと冷たい風が体を吹き抜けていくような淋しさにとらわれることもあった。その心境が次のようにうたわれている。

白刃もて我に迫れるけはしさの消えゆく人をあはれと思ふ

おそろしき恋ざめごころ何を見るわが目とらへん牢舎はなきや

『明星』終刊後の夫婦の地位の逆転は決定的であった。翌年、雜誌『スバル』が石川啄木・平野萬里・木下杢太郎・吉井勇らによって創刊されたが、寛夫妻は一寄稿家として投稿するだけであった。この時期になってくると晶子の短歌は『みだれ髪』時代の情熱はすっかり沈静して現実味を帯びてくるようになっていた。寛も同様だったが、晶子のほうがその傾向は強かった。これは年齢的なものもあるが、やはり大きな要因は苦しい家計を支えながら子供たちを育ててきた彼女の年輪を刻んだ眼が、おのずから現実を深くみつめさせるようになったと言ったほうがよいだろう。彼女の『みだれ髪』時代の激しい情熱の吐露は、みずからの生きる時代の現実と自己の生き方の姿勢との間に横たわるギャップに苦悩しながらのそれであった点で、寛に比べて自己の深奥を認識する洞察力はまさっていたにちがいない。そしてそのことが生活現実をみる眼のきびしさにつながり、時代に即応してある程度の説得性を持ち得たのだと私は考える。『明星』廃刊後は晶子に対する執筆依頼が多かったのもそこに原因があったのではないか。しかし、いくら晶子が働いてもくらしはますます苦しくなるばかりであった。そのような生活を続けているうちに、晶子の胸中をうつぼつとした思いが去来し始めたことは十分納得出来る。それは『明星』の名声を再び呼び戻そうと云う欲求だったであろう。彼女にとって『明星』はいわば分身のようなものだった。それが廃刊になり、日を追うごとに世間から忘却されていくことに漠然とした寂寥を感じていたことだろう。深く静かに、そしてきびしく現実をみつめようとする現在の自分が、今度こそ自分で納得できる『明星』を再興したい気持ちはつよかったと思う。さらにまた『明星』再興は寛のいらだちをも解消してくれることになる。

江上孝純はこのような寛・晶子にとって物心両面にわたるスポンサー的存在であったらしい。彼は知己を非常に大切にする人だったが、その知己の多くは学生時代に親交が生まれたし、それらの友人たちとの友情を大事にしていた。江上厳氏は「孝純は大学を出て故郷に帰ってから、いわゆる仕事の関係での知人は出来たが知己は作らなかったので、寛との関係は多分学習院時代に生まれたのではないか。」と言っている。この証言は、しかし江上家に保存されている寛の書簡の文面から考えて確証とはならないが、二人の年齢がほぼ同じであることを計算に入れればかなり若いころに知り合ったと思ってよいだろう。その寛夫妻の困窮を看過できずに、生活物資を送って助けていたらしい。「寛と江上孝純の親しさは普通の人のそれとは違っていたような気がする。」(江上厳氏談)。生活物資は主として「漬け鱠蝦(アミ)」や「米」などであった。この贈りものが苦しい家計を支える晶子にとってもどんなにうれしかったか。江上厳氏がまだ中学生だったときに晶子から孝純の妻の江上澪へ宛てた葉書を見せてもらったということだが、それには「そら阿弥陀(アミだ)待ってましたと手を合せ」の一句があったことを記憶していると語ってくれた。ちょっと戯れうたのようにみえるけれども、「鱠蝦だ」に「阿弥陀如来」の「阿弥陀」を掛けて、それに手を合わせたというところに晶子の感謝が込められているような気がする。そのような江上孝純は、『明星』再興という彼女の願いに関しても重要な存在であったことは大正十年十月二十七日付の晶子自筆の書簡からも十分にうかがえるので、ここに全文を引用しておく。

啓上

平素の御疎音をお宥し下さいまし。ますます御雄健に、理想的なる御生活を御建設の御事と存じます。

このたびはまた御国産の美味を沢山に頂き、御芳情と共に珍重して翫味してをります。私共の好物ですが、東京には無いものです。忝く存じます。

いよ〳〵私共の手にて、先輩や友人と協力し「明星」を再興します。何れ初号を拝呈しますから御批評を下さいまし。ジャアナリズム以外に自己を出したいと思ふ連中の手習草ですから、つまらぬものですが、追々によくして参りたいと考へます。御友人中へも御吹聴下さいまし。

初冬の季節、御自愛を祈上げます。

十月二十六日夕　　艸々

寛
晶子

江上先生侍史

寛との連署になっているが、筆跡と言葉の使い方の点であきらかに晶子の書いた書簡である。寛がいかに世間から疎外されているとはいえ、彼女にとっては夫であり、第一次明星の主宰者として歌壇の中心的存在として君臨した詩人である。晶子は自分だけの署名には出来なかったのだろうが、この書簡には彼女の執念(それは悲願と言ってもよい)が感じとれる。「ジャアナリズム以外に自己を出したいと思ふ連中の手習草です」という謙遜は、かえって積極性をすら感じさせるし、さらにその意気込みが伝わってくるのは封筒に書かれている「大分県中津町　二豊新聞社」の宛先である。単なる礼状とか形式的な挨拶状だったら江上孝純の自宅の住所「大分県宇佐郡八幡村」となっていてよいはずであるが、敢えて二豊新聞社宛に出したのは地方における二豊新聞の影響力からのメリットを計算する気持ちが心の底に潜在していたとも考えられる。まさに第一次明星廃刊から第二次明星創刊の経過は低迷し孤立化する寛夫妻、なかんずく晶子の歌壇への起死回生を計ろうとする心の軌跡であったことをものがたっている。だが、その第二次明星も歌壇復帰への起爆剤とはなりえずに昭和二年廃刊のやむなきに至るのである。この出来事は晶子はまだしも、寛をますます出口のないトンネルに追いこんでしまい、同時に生活費の工面の必要性はよりいっそう急を告げて、晶子の原稿料だけではもはや追いつかない状態だったのではないかと私は推測する。

昭和七年ごろだったと思うが、当時毎日新聞社が爆弾三勇士の詩を一般に懸賞募集した際に寛が応募していることが、今回の調査取材をして判明した。ここにも寛夫妻の生きざまのなかにおける江上孝純の存在が大きくクローズアップされてくる。寛の当時の生活情況から考えてみて、彼の懸賞応募には懸賞金の誘惑が背景にあったことは十分に考えられる。彼のこの行為は江上孝純を失望させた。孝純という人はいわゆる世俗的な名利に無欲な人だったし、純粋を愛する人物だったので、とくに寛の行動には怒りを誘発され、これを激しく叱責したらしい。いわく、「いくら落ちぶれたりとはいえ、寛といえば誰知らぬ者もないくらいに一時代を画した人物ではないか。その人間がアマチュアにまじって応募すれば入選するの当然だ。人間は恥を知るものだ。」と。その忠言に対する寛の返事の書簡が江上家に保存されている。このいきさつについては御子息の江上正孝氏が孝

純の生前に聞いたということである。書簡は長いので全文は省略するが、正孝氏の言葉を推察できる部分を抜き書きしておきたい。手紙はまずこう書き出している。「御高書に接し、大兄の御芳志の深きに感激致し候。五十歳に満ちしと云ふ迚にて、顧みて何の業績も無く、世に買被られて虚名を傳へ候のみに過ぎざる小生に、このたびのみならず、先年錦地へ参り、お目に懸りし際より、二三十年來の交友のごとく、御眞情を以てお親しくなし下され、其うへたび〳〵御厚贈にさへあづかり候こと、ひたすら感激致す外無之候。」（傍点筆者）。この部分は手紙の冒頭の挨拶文として一応割引いて考えるとしても、そのあとに続く文章はどうだろうか。「……推して御想像申上候處によれば、定めて御郷國の人文のためには勿論、御友人、御血族の間にも、博大の御愛情と純眞なる御熱誠とを以てお謁しなされをりし御事と存じ申し候。……小生も猶十年は生き永らへ、仰のごとく還暦の賀には大兄と東京にてお目に懸りたく、それまでには、駑馬もまた最後の駆歩を試みて何ばかりかの文学的連作を書きためたきものと、心窃かに期しをり候。何卒御鞭撻を願上候。」（傍点筆者）。

「博大の御愛情と純眞なる御熱誠云々」ということばからは、江上孝純が厳しいけれども深い思いやりを以て、懸賞に応募した寛の行動を諌め、純粋な文学活動をするように忠告したことが十分うかがえると思う。それを受けて寛は、詩人としての最後の残された人生のなかで、再びみずからの文学を確立せんと決意を新たにしたのが、「駑馬もまた最後の駆歩を試みて何ばかりかの文学的連作を書きためたきものと、心窃かに期しをり候。」という一文ではなかろうか。残念ながらこの江上家所蔵の書簡は表装されていて、封筒がないために年号不明であるが、江上正孝氏夫妻の証言と書簡の内容から私は、江上孝純が寛の内面に深くくいこんでいたことを推察するのである。

とにもかくにも江上孝純の忠言は行き届れていた鉄幹の目を覚まさせたことは疑いないであろう。しかし、彼の決意表明は、「ますらをぶり」をあくまでも堅持しようとする狭小な自己の世界によって空回りに終わってしまうのである。そのことを何よりも如実に物語っているのは「素描二章」と題した詩の原稿である。これは「潜水艇友鶴」と「燈臺守の歌」の二つの作品から成っている。

。潜水艇友鶴

潜水艇「友鶴」をめぐるは
颶風と怒濤。

肥前の海の夜は暗し、
艇はしばしば天を行く。
「乗り切らん、」
粛たり、全艇員の部署。

潜水艇「友鶴」は
沈著なる抵抗のなかに、
突如として怒濤に呑まる。
艇員の倒れて起き上がる時
電燈は消ゆ、
艇は回旋して沈む、沈む。

浸水の音、
機関の裂くる音、
鐵扉をとざす音、
更にまた浸水の音。
艇長の使命は
既に傳はらず。

「平生の覚悟を乱すな」と、
云はざれども、皆、
この危急の刹那に
内の心に叫ぶ。
艇は沈み終れるが如し、
全艇員、なほ部署を守る。

時經たり、
救援は來らず。
みな呼吸苦し、頭重し、
時經たり、
僚友は黙す、
この室、かの室。

今は命なり、
共に遺す所あらん。
手探りながら、
軍刀の尖に
最期の忠烈を示す、
鐵壁の上。

一人は書く、
「一死奉公の秋、
憾むらくは
千九百三十六年に死なざるを。」
打揃ひて書く、
「天皇陛下萬歳。」

この詩は多分当時の少年雑誌かなにかに寄稿するためのものだったのだろうが、それにしても観念的な世界を脱していない。まず彼が「潜水艇友鶴」と言っているのは正確には「水雷艇」である。「友鶴」は昭和九年に最新鋭の水雷艇として建造され、試験航海に出て嵐に会い沈没している。原因は構造上の欠陥によるものだが、そのデビューから最期までが劇的であったがために国民のあいだに非常に美化されて喧伝されたと聞く。皮相な詠嘆調の詩は寛の特徴であるが、それが現実を確実にみつめる眼を失わしめている。「水雷艇」を「潜水艇」と言っているのは彼の洞察力の浅さを如実に示していると思う。いずれにしても、江上孝純の温かい思いやりと詩人としての自覚と誇りを回復することを期待した叱責は四面楚歌の状態に追いこまれていた寛にとって、心の味方を得たようなものだったろう。こうして文学活動の決意を表明した彼だったが、所詮は時代の風潮に安易に迎合する結果になってしまったのは皮肉である。

江上孝純なる人物は確かに寛・晶子にとって公私にわたる重要なスポンサーの一人であった。このように書くと恐らく、「昔の歌人はいろいろな人から贈りものを送られていた。それは歌人としての地位を築きあげたいと願う人たちからのものが多かった。だから江上孝純が品物を送ったりしているのをスポンサーと判断するのは早計だ。」という批判が起こるだろう。しかし、江上孝純は名利欲のまったくなかった人である。例えばこのようなエピソードがある。彼は弁護士であったために郷土の人々からいろいろな問題の処理や相談を持ちかけられていたが、依頼人が正当な謝礼を持ってくると、「そんなものは要らん。持って帰れ。」と断わっていたらしい。それでも置いて帰った時には、あとで家の人に郵便で送り返させていた。それほどの人物が、寛にとりいって名を出そうと考えていたとはどうしても考えられない。しだいに孤立の渕に立たされていった寛にとって物心両面にわたるスポンサーであったと判断するゆえんである。江上孝純の激励もむなしく、寛はついに再び詩歌壇の中心によみがえることなく昭和十年三月二十六日、満六十三歳でこの世を去った。

## 第三章　鉄幹死後の晶子の心境

一昨年の夏ごろ、研究発表のための資料原稿を執筆している最中に私は一枚の葉書を入手することができた。湯河原の中西という人物の家から兵庫県の芦屋に住む丹羽安喜子にあてた與謝野晶子の絵葉書である。この丹羽安喜子なる人物は、晩年の晶子が短歌の添削をしてやっていた、いわば弟子にあたるような存在だったのではあるまいか。晶子自筆の短冊との出会いに始まって、いよいよ晩年になっての心境を吐露した彼女の葉書入手によってしめくくることの因縁に驚くと同時に、その貴重な資料をこおどりして迎えた。その全文を紹介してみよう。

啓上　御容躰いかゞにとやお案じいたし居り候。傷に宜しき湯にて一度近くバこちらへ御こしをおすゝめいたすべきにと存じ候。私もこの度は全く癒えるまで滞在のかくごいたし居り候。
荒らけたる山の雨をバうち見つゝ
仙たらんなど思ふにいたる

正確に判読できない部分もあるが、およそこのような文章である。この葉書がいつのものなのか、郵便局の消印が不鮮明で日付がまったくわからない。そこで貼付してある切手がいつ発行されたものなのかを調べることから推察を始めた。切手はいわゆる「乃木切手」といわれている二銭の切手である。切手年鑑によるとこの切手は昭和十二年から十五年にかけての間と、十五年以降もしばらく発行されているが、昭和十五年五月に晶子は脳溢血で倒れて右半身不随になり病床に臥している。しかるにこの葉書の文字は当然のことながらそのようなときに書かれたような文字ではないくらいにしっかりしている。とすると昭和十二年から十

五年のあいだに書いたものだということになる。私は、これまでに出版された全集と、さらには一昨年十二月十四日に発行された「定本與謝野晶子全集　第八巻」の年譜を調べてみたが、そのどこにも湯河原に静養したという記事は見あたらない。ただし、これはあくまでも私の手許にある資料の範囲内であるが――。そこで次の手がかりを葉書の文面にあるように、湯河原の湯が傷に良いということと、晶子自身完治するまで滞在する意志を示しているという点に求めた。その辺から、晶子が傷あとを癒やすために湯河原温泉に滞在していたのではないかというような推測を立てたのである。それを手がかりにもう一度年譜をあたってみると、晶子は昭和十三年四月に盲腸の手術を受けて五月に退院していることがわかる。そして、その後九月、十月、十一月と旅行をしている。その点を考えると、その間に術後の養生と体力および精神の回復を主眼に湯河原に滞在していたというふうに糸をたぐり寄せることができた。すなわちこの葉書は昭和十三年に書かれたものだということになる。この推論を決定的にうらづけるために、湯河原で作った歌がないかと思って調査してみると「定本與謝野晶子全集　第七巻」中の『白櫻集』五月雨抄に三十一首と續湯ヶ原抄に四十首収録されていた。五月雨抄の初出は昭和十三年六月号の『冬柏』に、續湯ヶ原抄のそれは昭和十三年八月号の『冬柏』に発表されている。となると、この葉書は昭和十三年の何月に書いたものなのか。晶子の記してある日付は「七日」と判読する人と「七月」と見る人との二派に分かれたが、私は「七月」と判断した。その根拠は葉書の中の歌の「荒らけたる山の雨」という部分である。この雨の感じは五月雨のそれではなく、真夏の雷鳴を伴なった激しい夕立と考えたほうがやはり自然であるからだ。

さて、昭和十三年といえば寛が死んで三年後である。彼の死は晶子をして、決定的に「自分ひとり」という感をあらたにする出来事だった。心のなかにぽっかりと穴があいたような心境に加えて、盲腸の手術という彼女自身のアクシデントがさらに追いうちをかけるように、現実における人間のさまざまな思惑のむなしさと人間の生のはかなさを痛感したはずである。師鉄幹を越えようとして激情を吐露しつづけた若き日の人生、そして結婚後は孤塁をひたすら守ろうとして惨たんたる敗北を喫した寛への世評を正面から受けとめながら彼の浮上のために腐心したり、極貧の生活を支えての苦闘の人生を静かにふり返りながら脱俗の境地を求めた心境が、この葉書には如実に語られているように思えてしかたがない。

西欧的な新しさを旗じるしに大胆に旧派和歌を打倒し、虎の鉄幹と異名をとった丈夫寛は若き日の晶子の文芸上の絶対的指標であった。その彼がしだいに時代から忘れられ、生活の困窮も伴って、攻めの姿勢を失うにつれ、時には彼への愛にかげりを感じることもあった晶子だったが、しっとりと落ち着きのある夫婦の晩年を経て、いま夫とも死別して独り居の生活の時間を湯河原の静寂のなかに送っていると、今更のごとく寛へのなつかしさがこみあげてくると同時に、一切の煩らわしさを超越して、澄みわたった雨後の空のような老後を送りたいと思うようになったのもむべなるかなと考えるのである。退院と同時に湯河原に入り、七月ぐらいまでかなり長期にわたって心身の疲れを癒やしたのは、知らず知らずのうちに彼女の内部において人生の結末を迎える心の準備が整いつつあったのかもしれない。

病癒え新しき日と云ふべくも餘り寂しき山の湯の客

湯ヶ原の中西の湯に留まりて數へらるるもはかなき月日

（「五月抄」―冬柏　昭和13・6）

病めるのち世捨人ともなりにけり自らはつゆ知らぬまに

一町の洞より出でてひぐらしを聞くごと君の聲聞かしめよ

（「續湯河原抄」―冬柏　昭和13・8）

『白櫻集』の湯河原での歌はそのほとんどが完全に主観を沈潜させて山の情景を静かに客観的に詠じている。そして、これらの収録された歌のなかには葉書に書き添えられた短歌はない。これはあきらかに彼女の未発表作品であることはまちがいないだろう。しかも、非常に強く正面からストレートに自分自身の心境を表白している点でおもしろい。

「荒らけたる山の雨をバうち見つゝ」。この上句は意味深長である。ひなびた静かな山の湯の宿におりから激しい夕立が降ってきた。そのたたきつけてくるような雨脚を眺めているうちに、晶子の脳裡に激情にまかせて激しく生き抜いてきた過去の嵐のような人生がオーバーラップされてよみがえったのかもしれない。しかし、それらの思い出はもはや彼女の心をたかぶらせることはなく、静かにふりかえる余裕を彼女はすでに持つまでに至っていた。こうして過ぎ去った時間を回顧するときに「仙たらんなど思ふにいたる」、すなわち「人間のさまざまな思惑や欲望の渦巻く俗世の何と虚しいものか。自分はそのようなものの一切から超越

して、ひたすら仙境に入って静かなまろやかな余生を送りたいとしみじみ思うようになった。」という心境に到達したのであろう。この手紙が、ほんとうに腹を割ってすべてを話せる知人にあてたのと、推敲なしでいわば書きおろしの状態で書いた短歌であるということが、はからずも品子の正直な心情を吐露させる結となったにちがいない。ここには、大正十年十月江上孝純に書いた第二次「明星」発刊に関する協力依頼の書簡にみられる、控えめながら強い野心にみなぎった姿勢はもはや遠いものとなって、運命に従順なカドのとれた品子の素顔があらわれている。「私もこの度は全く癒えるまで滞在のかくごいたし居り候。」。品子は、盲腸手術の傷とともに、あらゆるかたちで心の中にくい込んでいる人生の古傷を徹底的に洗い流そうとしたのであった。

## 第四章　あとがき

私が書いてきたこの文章は決して研究論文といえるものではない。ただ単にメモ風に書きとめただけだと言ったほうが適切である。しかもこれまで系統的に與謝野寛・品子に関する研究を積み上げてきたわけではなかった。前記のごとくそれは全くの偶然のきっかけによって始めたのである。しかし、往々にして偶然が非常に興味深い事実を知ったり、かくされた文学者の素顔を推論したりする糸口を与えてくれるからおもしろい。

ところで私が「偶然」との出会いによって背後関係を調査し、文章化しようと思ったのはもちろん直接の動機は研究発表の依頼を受けたことによるのだが、その初動的動機は寛・品子の書簡との因縁めいた出会いから何となく抱き続けていた事実解明に対する欲求だったのかもしれない。通りすがりに入った古書店で寛と品子の書簡のあることを知らされたことだけでも信じられないほどの幸せであるのに、その書簡の相手が大分県宇佐郡八幡村（当時）に住む人物だったことは、目に見えない糸でつながれたような運命の不思議さを思わずにはいられなかった。私は敗戦後の数年間をこの地で過ごした体験を持っていたからである。ために私にとってそれは単なる文献以上の存在となった。いずれ調査研究にとりかかりたいと考えていたが、時間の関係で延び延びになっているうちに研究発表の必要に迫られて実行に移ったしだいである。書簡の文面に語られていることばの端々から手がかりを見出だしていくというような漠然とした調査の困難さの反面に、寛・品子の知られざる素顔が浮かび上がってくることへの期待は強くなる一方であった。確とした具体的資料の乏しい状態のなかで、人の話を聴いて推論していくという壁にぶつかりながらも、何とか挫折しないで続けたのはこの期待感の高まりがあったからだろうと思う。

書簡文は作家や詩人の日常の心境が率直に表れている点でなかなかに得難い貴重な資料だといえる。寛の大正九年と昭和七年ごろに書いた二通の書簡によって、九州大分県の小村に住む一人の人間が文学史上に厳然として君臨する歌人の人知れぬ側面に入りこんでいる重要な存在となっていた事実を知るにおよんで、むしろ私は寛という人間の底抜けに人間的な生きざまをとらえることが出来たのは実に貴重であった。そしてまた、品子の書簡からは歌壇へのあくなき執着を捨てきれない、いわば陽の姿と、困窮した生活のなかでひたすら苦闘する糠味噌くさい彼女の陰の姿の両面をさぐりあてることができた。

寛はその強い性格から終始一貫して鉄幹調の世界を守りとおそうとしたが、それは彼の信念の固さを示していると同時に、みずからが直面する現実の壁に対して、観念的世界への逃避の姿勢ともなり、安易に時流に迎合する結果をもたらしたともいえる。その意味で寛は才能において一種の脆さを有していたのではあるまいか。自分の子供に文学の才能のないのを見て、「芸術の世界で家元制度は芸術への冒瀆である」という結論を出し、子供たちにはすべて芸術以外の方面の仕事をさせたと寛の長男の與謝野光氏が述べていることから、寛自身がその意識の底においてみずからの才の限界の自覚と迷いを抱いていたであろうことを雄弁に物語っていると思う。一方品子は生活苦との直接的なたたかいから、寛にはほとんどみられなかった生活現実直視の世界を切り開き、短歌のみならず評論などの面において、時代的制約のなかでの人間の生きかたを大胆に表明することを忘れず、究極的にはそれらの人生の果てに透徹した超俗の世界に到達しようとしたのである。

それはともかくとして、私のこの拙文は私自身の文学研究のほんの一里塚と考えている。すくなくとも、これまでの與謝野寛・品子の研究とはすこし違う側面からほのかなスポットライトを照射し得たのではないかと自己満足しているのであるが、今後も機会があればあらたな資料を入手して、本研究を継続発展させていきたいと願っている。御批判と御叱責を乞う次第である。

—福岡県立小倉西高等学校教諭—